鹿児島大学歯学部第2口腔外科学講座開設後3年間の患者の臨床統計

三村 保・大枝直樹・田中 勉
吉嶺真一郎・木脇雅子・宅間政次

Statistical observations on patients at the Second Department of
Oral and Maxillofacial Surgery Kagoshima University Dental School
Hospital during the first three years

Tamotsu MIMURA : Naoki OHEDA・Tsutomu TANAKA
Shinichiroh YOSHIMINE・Masako KIWAKI・Masatsugu TAKUMA

Abstract: Patients at the Second Department of Oral and maxillofacial Surgery Kagoshima University Dental School Hospital during the first three years (April, 1981-April, 1984) since its the establishment were analyzed statistically.

- 1. There were 613 new patients in the first year, 743 in the second year and 667 in the third year. These figures accounted for about 20% of all patients at the hospital.
- 2. Inpatients increased each year, i.e., 99, 131, and 154.
- 3. Cleft lip and/or palate cases markedly increased each year, i.e., 34, 36 and 68. The number of plastic operations for these patients amounted to 37, 36 and 67.

Key words: statistical observation, oral and maxillofacial surgery

緒言

対象ならびに分類

鹿児島大学歯学部第2口腔外科学講座が昭和56年4月に開設されて以来、3年が経過した。われわれは先に当科開設後1年間の患者の臨床統計的観察を行ったが¹⁾、今回、開設後3年間の患者を集計し、患者動向の経年的変化を比較検討したので報告する。

当科の概要: 当院ならびにその地域的背景の概要については前回報告した通りである。当科は当初4名で発足して以来、図1に示す変遷があった。診療形態は発足後変化なく病院の初診患者受付が月水金の週3日、うち水曜日が当科初診日である。当科の手術日は週2日で、全麻下手術はうち1日のみである。病床は全体で40床のうち14床が当科占有病床で、12床が他科との共用病床である。

昭和56年4月22日～昭和59年4月21日までに鹿児島大学歯学部付属病院第2口腔外科を受診した患者を調査対象とした。

疾患の分類区分は、(1) 奇形・発育異常、(2) 外傷、(3) 炎症、(4) 粘膜疾患、(5) 嚢胞、(6) 腫瘍、(7) 唾液腺疾患、(8) 顎関節疾患、(9) 神経疾患、(10) 血液

図1 スタッフの変遷

鹿児島大学歯学部第2口腔外科学講座
(主任: 三村 保教授)
Second Department of Oral and Maxillofacial
Surgery Kagoshima University Dental School
(Chief: Prof. Tamotsu Mimura)
受付日: 昭和59年7月18日

表 1 各年度の当科初診患者総数

	昭和56年度	昭和57年度	昭和58年度
当科受診患者総数	616	743	667
病院全受診患者総数	3,187	3,568	3,361

表 2 疾病の分類と疾患別患者数

疾 患		56年度	57年度	58年度
奇 形	裂奇形	41 (24)	53 (26)	79 (45)
	小帯異常	25	11	11
	その他	3	6	26
外 傷	軟組織外傷	17	4	30
	硬組織外傷	24	24	16
炎 症		260	310	280
粘膜疾患		45	77	42
囊 胞		25	19	21
腫 瘍	良性腫瘍	30	26	16
	悪性腫瘍	14	11	5
唾液腺疾患		25	52	37
顎関節疾患		62	43	41
神経疾患		16	15	11
血液疾患		6	3	3
その他		23	89	49
合 計		616	643	667

() は一次症例数

疾患、(11) その他、とした。疾患分類にあたっては、初診時の疾患を採用した。疾患が重複する場合は、主体をなす疾患を採用し1患者1疾患とした。

集 計 結 果

1. 初診患者について

表1に各年次の当科初診患者総数を示した。同時期の歯学部付属病院新患者数に対する比率は昭和56年度19.3%、57年度20.8%、58年度19.8%と各年度ともほぼ20%を占めている。

各年度ごとの月別新患者数を図2に、地域別患者内訳を図3に示した。患者のほとんど全てが鹿児島県内在住者で、その半数以上が市内在住者であった。県外患者は宮崎県在住者が多かった。

疾病別患者数を表2に示した。各年度とも炎症性疾患が40%強を占めている。裂奇形患者は初年度41名(うち一次症例24名)に対し、3年目では79名(うち一次症例45名)と、顕著な増加を示した。外科矯正を必要とする

表 3 入院患者の疾患別分類

疾 患		56年度	57年度	58年度
奇 形	裂奇形	34	36	68
	小帯異常	2	2	0
	下顎前突症	1	4	4
外 傷	上顎骨骨折	4	1	1
	下顎骨骨折	11	15	16
	その他	1	3	6
炎 症		10	18	15
粘膜疾患		2	2	5
囊 胞		14	10	9
腫 瘍	良性腫瘍	7	9	7
	悪性腫瘍	13	13	11
唾液腺疾患		0	14	7
血液疾患		0	2	2
その他		0	2	3
合 計		99	131	154
全受診患者に対する 入院患者の比率		16.1%	17.6%	23.1%

顎変形症患者も徐々に増加傾向にあった。腫瘍性疾患は58年度に減少を示した。

全患者の年齢別分布を図4に示した。

2. 入院患者について

入院患者の疾患別分類を表3に示した。当科初診患者に対する入院患者の比率は初年度16.1%、2年目17.6%、3年目23.1%で漸増の傾向を示した。2年目の入院患者数の増加は唾液腺疾患と炎症性疾患、3年目は裂奇形患者の増加によるところが大きい。特に3年目では全入院患者数154名のうち68名(44%)が裂奇形患者で占められた。

入院患者の年齢別分布を図5に示した。58年度で0歳代の患者の増加が著しいのは、裂奇形一次症例の増加によるものである。他の年代での増減には、特定の疾患の関与はなかった。

3. 中央手術室での手術症例について

3年間に中央手術室で行った当科の手術内容を表4に示した。入院患者の増加にともない手術件数も増加している。58年度には、全身麻酔下手術症例が76例となり、局所麻酔下手術症例70例を上まわった。疾患別では口唇口蓋裂の形成術および下顎骨切り術症例が増加している。

考 察

当科受診新患者数は各年次とも病院全体のほぼ20%を

表 4 疾患別手術件数

疾 患			56 年 度		57 年 度		58 年 度	
			全 麻	局 麻	全 麻	局 麻	全 麻	局 麻
奇 形	口唇形成術		14	7	19	7	34	8
	口蓋形成術		4		4	1	18	
	咽頭弁移植術		3		2		1	
	鼻変形修正術			6		3	1	4
	Abbe flap op			2				1
	口腔前庭腸骨移植術			1				
	舌小帯形成術		2		2			
	骨切り術		1		2		5	
	術後スクリー除去					2		1
外 傷	上顎骨骨折整復固定術		3		1			3
	下顎骨骨折整復固定術		4	4	3	7	1	7
	プレート除去術			4		5		8
	瘢痕除去					1		1
炎 症	リンパ節摘出術		2	3		3		
	上顎洞炎			2	1	5		5
	その他			2		3	3	4
粘膜疾患		冷凍療法				2		1
囊 胞	甲状舌管嚢胞		2	1				
	リンパ上皮性嚢胞		1		1			
	濾胞性歯嚢胞		1	2	2	3		2
	術後性頬部嚢胞			7		4		6
	切歯管嚢胞			1				
	歯原性角化嚢胞							1
腫 瘍	良 性	切除	1	3	1	4	3	5
		冷凍療法		2	1	4		
		プレート除去		1				
	悪 性	切除・頸部郭清	4		9		5	2
		プレート除去				3	1	3
		試験切除 Necrotomy		7		2		1
唾液腺疾患	唾液腺摘出術					5		4
	腫瘍摘出術				3		4	3
	貯留嚢胞摘出				1			
	ガン腫開窓					1		
合 計			42	55	52	65	76	70
			97		117		146	

占めた。入院を要した患者数は漸増の傾向を示し、講座開設後3年目の58年度では、新患者数に対する比率は23.1%となった。この増加は主として口唇口蓋裂患者の

増加による。年次別新患者数に対する本疾患患者の占める比率も初年度6.6%、2年目7.1%、3年目11.8%と増加してきた。

図2 月別受診患者数

図3 地域別受診患者数

図4 全患者年齢分布

当科では講座開設当初より口唇口蓋裂患者に対する一貫治療の実施を重点事項の1つに取り上げ、システムの整備と治療水準の一層の向上に努めてきた。この一環として、昭和57年度、続いて58年度に「唇裂・口蓋裂患者のための治療相談会と講演会」を本学にて開催した。ま

た、南九州地区を中心とした「唇顎口蓋裂児の親の会、別称“もみじ会”」設立に積極的に協力し、昭和57年1月にその結成をみた。地域に対するこの様な働きかけを積極的に行うことは、患者の啓蒙と福祉につながるのみならず、地域医療の向上に貢献することになると考え

図5 入院患者年齢分布

る。

手術件数は入院患者の増加に比例して増え、58年度には全身麻酔下手術症例が局所麻酔下手術症例を上まわった。全身麻酔下手術では GO+Ethlane ないし GO+NLA 原法が、局所麻酔下手術では diazepam+pentazocine 静脈内投与²⁾を併用し、良好な術中術後の患者管理を得ている。

疾患別手術件数では口唇口蓋裂症例ならびに下顎骨切り症例の増加が顕著で、これらの形成手術に際しては種々の工夫を考案し³⁻⁷⁾、より高い治療効果を得るように努めている。

結 語

鹿児島大学歯学部第2口腔外科開設後3年間(昭和56年4月22日～昭和59年4月21日)に当科を受診した新患者について集計・観察し以下の結果を得た。

1) 新患者数は56年度616名、57年度743名、58年度667名で、当大学病院受診新患者数に対する比率はそれぞれ、19.3%、20.8%、19.8%であった。

2) 入院を要した患者数は56年度99名、57年度131名、58年度154名で当科受診全患者数に対する比率はそれぞれ16.1%、17.6%、23.1%であった。

3) 口唇口蓋裂患者で入院・手術を要した症例は56年度37名、57年度36名、58年度67名で、入院手術を要した

全患者数に対する比率はそれぞれ38%、30.7%、45.9%であった。

引 用 文 献

- 1) 田中 勉, 太田一男, 他: 鹿児島大学歯学部第2口腔外科学講座開設後1年間の患者の臨床統計. 日口外誌 29: 726-731 1983.
- 2) 大枝直樹, 三村 保, 他: 口腔外科領域の局所麻酔下手術における diazepam + pentazocine 静注の併用. 鹿大医誌 34: 505-512 1983.
- 3) 三村 保, 大枝直樹, 他: Push back operation における前方閉鎖のための切歯弁(切歯動脈島状弁)の利用. 日口蓋誌 6: 1-7 1981.
- 4) 三村 保, 大枝直樹, 他: 下顎骨における骨接合ねじによる固定法について. 日口外誌 28: 849-857 1982.
- 5) Mimura, T., Oheda, N., et al.: Devices for Premolar Set Back Operation: Report of a case. Acta Med Univ Kagoshima 25: 39-45 1983.
- 6) 三村 保: 口唇裂一次手術において良好な赤唇形態を得るための方法. 日口外誌 29: 65-70 1983.
- 7) 三村 保: 口唇外鼻の二次修正——とくに外鼻について——. 日口外誌 30: 542-551 1984.